復活節第6主日メッセージ「わたしにつながっていなさい」

ヨハネによる福音書15:1−8　　2020年5月17日　聖職候補生 島 優子

今日の福音書は有名なぶどうの木のたとえが読まれます。旧約・新約共に聖書にはぶどうの木やぶどう園にまつわる話がたくさんあります。日本ではぶどうは高級な果物の印象がありますが、パレスチナは現在もぶどうの産地であり、聖書の時代でもごく一般的な果物でした。その外見から容易にイメージできるように、今日の箇所では、ぶどうは「イエス様とイエス様に連なる者たち」を表しています。

このたとえ話は、イエス様が十字架にかかる前夜、それまで付き従ってきた弟子たちとの別れに際してなさった長い告別説教の一部分です。繰り返し音読してみると、「つながる」という言葉の多さに気が付きます。枝は木につながっていないと、養分を得られず枯れてしまいます。枝に譬えられた弟子たちに、ぶどうの木であるイエス様につながっていなさい、そして豊かに実を結びなさいという、イエス様の心からの願いと、残される弟子たちへの愛情が伝わってくるようです。

弟子たちへ語られていることは、言うまでもなく時を超えて私たちに対して語られていることです。では「イエス様につながっている」ためにはどうしたらよいのでしょう？洗礼を受けてクリスチャンになれば、自動的につながっているような錯覚に陥ります。たしかに洗礼は信仰生活の始まりであり、救いの道の入り口でもあります。しかしそれでも人間は弱い存在で、さまざまな誘惑や苦難に負けて、神様の道を踏みはずしていきます。2 節に「わたしにつながっていながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる」とありますが、例えばイエス様の最も近くにおいて見て仕えていた 12 使徒たちでも、最後はイエス様を裏切り逃げ去ります。真のつながりではなかったのです。

「イエス様につながる」ために注目したいのは、3 節「わたしの話した言葉によって、あなた方は既に清くなっている」、7 節「あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたの内にいつもあるならば～」という所です。主イエスの言葉によって私たちは養われ、罪が赦され清くされ、その生き方に倣って歩む時、初めて「豊かに実を結ぶぶどうの枝」、つまり真の弟子になれるのでしょう。

ぶどうの木のたとえはヨハネ福音書にのみ書かれています。この福音書が書かれた時代は、ユダヤ教徒からの激しい迫害の中、キリスト教徒は会堂を追放され、信仰を捨てた者もおりました。著者はそのような状況も憂慮しつつ、この話を書き記したのでしょう。迫害と疫病では事情が違いますが、教会に集うことができないということで言えば、今、私たちも同じ状況下にあります。主日礼拝に出席できず、聖餐に与れない日が長期化する中で、心が満たされず、主イエスのご復活を素直に喜べない心境にある方もおられるでしょう。強風で吹き飛ばされたり、栄養不足の枝になる危険の中にあるとも言えます。「わたしを離れては、あなたがたは何もできない。わたしにつながっていなさい」と何度も呼びかけるイエス様の声にどのように応えるのか、まさに信仰が試されているような気がしてなりません。逆境の中にある今だからこそ、私たち一人ひとりはイエス様に固くつながり、御言葉によって生きる力をいただき、そして父なる神の手入れによって豊かな実を結ぶことができるよう、お互いに祈り合って再会の日を待ちたいと思います。